

Practice to connect with the city in International Art Exhibition : A Case of “Trolls in the Park 2020”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 俊博 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1419

国際アート展における街とつながる実践 トロールの森 2020 を事例として

Practice to connect with the city in International Art Exhibition
: A Case of “Trolls in the Park 2020”

水谷 俊博*1
MIZUTANI Toshihiro*1

地域計画	街づくり	自然環境
アート展	インスタレーション	ワークショップ

1. はじめに

東京都立善福寺公園を主会場として年に 1 回開催される国際野外アート展、「トロールの森」(主催:「トロールの森」実行委員会、後援:東京都(東部公園緑地事務所)、杉並区、杉並区教育委員会、助成:東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京、杉並区文化事業助成事業、企業メセナ協議会)。2002 年にスタートし、2020 年は 19 回目の開催となる。

「トロールの森」は、都心部の施設内部(美術館等)等で開催される通常のアート展と違い、都立善福寺公園から JR 西荻窪駅周辺までを中心とし、街中フィールドに

展開されることが大きな特徴であり、善福寺公園で開催される屋外アート展示と並行して、野外劇や街とリンクした「野外×アート×まちなか」というアートイベントが様々なかたちで展開されている。

2. トロールの森 2020 概要

「トロールの森 2020」は善福寺公園の屋外展示に 25 作家の出展、屋外劇場の演目に 14 アーティストの出演、まちなかアートイベントとして 15 のイベント企画が開催された。開催会期は、2020 年 11 月 3 日(火・祝)～11 月 23 日(月・祝)。



■ 善福寺公園上池東岸サイドにおける作品展示風景

*1 工学部建築デザイン学科教授



■ 作品に接する子どもたちの様子

「トロールの森 2020」においては、「武蔵野大学水谷俊博研究室」名義で出展し、『Obscured by Clouds』という作品を、「野外×アート」部門において展示をおこなった。

(出展に際しては、プロポーザル形式により、1 次の書類審査 (2020 年 4 月 2 日提出締切)、2 次のプレゼンテーション・面接審査 (2020 年 5 月 16・17 日) を経て、入選・出展の運びとなった)。「トロールの森」には 2013 年より出展を継続しており、2020 年の本展示で 7 回目の出展となる。アート展「トロールの森」全体の 2020 年のテーマは“キョトン Bewilderment”ということで、作品展示と併せて作品に寄り添うかたちのパフォーマンスを会期中におこなうことを企画した。

3. 野外展示作品概要

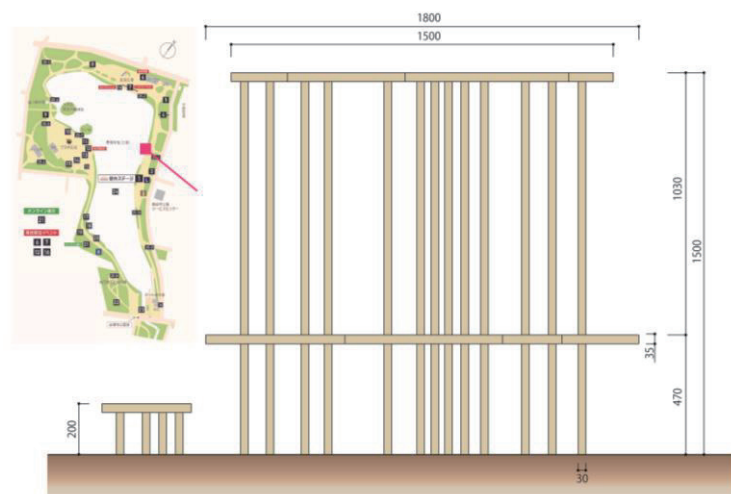
野外展示作品『Obscured by Clouds』は、普段空に浮かぶ雲が地上に降りてきたという非日常の様相を日常につくりだした参加体験型のインスタレーション兼アート作品である。アート展のテーマ「キョトン」より、人が思わずキョトンと頭が空白になる瞬間は、日常の中で非日常な様相に出会うときであると捉え、自然豊かな公園の

中で人々が活動する「日常」に、普段は空に浮かび物理的な距離があり身近には感じづらい存在である「雲」が降りてきたら、という「非日常」の仮想空間を創出した。

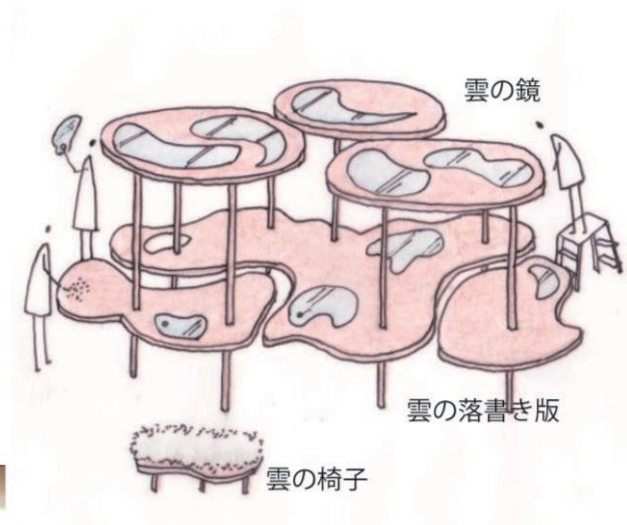
1,000mm×1,800mm(最大部)×H1,500mm の作品は善福寺公園上池の中央部入口付近に設置され、3 種のアプローチから雲を感じることができるよう、3 つのパーツ「雲の鏡」「雲の落書き板」「雲の椅子」に分かれている。

まず、「雲の鏡」は GL+1,500mm レベルに設置された楕円形の 6 枚の木板 (厚 30mm) に鏡面加工したアクリル板を設置したパーツである。大人の目線高に位置する鏡は、脚立に上り、空の雲が写し込まれた鏡をのぞき込むことで、空と雲を「見上げる日常」から「見下ろす非日常」に出会うことができる、という仕掛けとなっている。

「雲の落書き板」は「雲の鏡」の下部、GL+H470mm レベルに位置する雲形に切られた 4 枚の木板のパーツである。会期の後半より、4 枚の木板に来場者に「雲に関する言葉や絵」を落書きしてもらったワークショップを行った。落書きに「雲に関する」という制約があることで、参加者は一瞬“キョトン”とした後、各々が思い浮かべる雲に関連する絵や言葉を作品に付与する体験をする。



■ 作品配置図、立断面図



■ 作品コンセプト・イメージ図



■「雲の鏡」パーツ：空と雲が映り込む鏡面板を設置



■「雲の椅子」パーツ：質感も雲を表現

また、「雲の鏡」同様に鏡面加工されたアクリル板を 4 つの木板に埋め込み、鏡に映った空と雲を見下ろすことができる仕掛けを採り入れた。「雲の落書き板」の鏡には「雲の鏡」パーツのいわば軒裏面も映り込むことで、実際の空&雲と、雲をモチーフにした作品、の 2 つの景の映り込みを楽しむことができる。更に、「雲の落書き板」のアクリル板は取り外し可能とし、アクリル板の鏡面塗装を鏡面と透明の箇所をグラデーション加工にすることで、参加者が自ら鏡の角度を調整しながら、同時に「鏡に映り込む自分と鏡の向こう側の空」や「自分の後ろの空と鏡の向こう側の空」を見る、という体験ができる。

「雲の鏡」と「雲の落書き板」は直径 30mm の柱材により一体に制作されている。「雲の落書き板」を貫通し、落書き板の裏面で金具によって固定された 22 本の柱材の

上に「雲の鏡」の木板を、いわば屋根のように被せるように設置することで、接合部が見えず、それぞれの木板が雲のように宙に浮く姿を表現している。

「雲の椅子」は「雲の鏡」と「雲の落書き板」の周辺に置かれた 5 つの椅子のパーツである。座面を雲形にカットした木板に、雲を見立てた白いクッション材を取り付けた。クッションは、網目が粗い滑り止めマットに短冊状のネット、布、タオルを結びつけ制作している。3 つの異なる素材のクッションにより、動きのある視覚だけでなく、座り心地の違いを感じることができる。

高さ 200mm の椅子は、子供の低い目線から作品（雲）を体感できる。また、子供には「雲の落書き板」と「雲の椅子」が机と椅子の関係となり、鏡をのぞき込み、落書きワークショップに参加できる仕組みになっている。



■取り外し可能なアクリル板（鏡面塗装）に映り込む風景



■作品と、実際の空・雲が映り込む「雲の落書き板」の鏡



■落書きワークショップ（「落書き板の雲」の様子）



■公園内を浮遊する「雲」の演者



■作品の周囲でパフォーマンス（「雲の妖精」）をおこなう様子

また、作品展示と並行して、武蔵野大学3年生の「建築学演習」の活動一環（「建築で演じる、都市で踊る－トロールの森に肖る－」というテーマをたて）により、出展作品に対して会期中に新しい企画を立て、アート・パフォーマンスを实践するプロジェクトに挑戦した。付与したテーマは『公園内に舞い降りた雲の妖精（トロール）と雲』。野外展示作品のテーマに則り、パフォーマンスと公園内の浮遊を行った。パフォーマンスでは「雲の妖精（トロール）」としてミニマムな舞踏をおこない、自作のオリジナル衣装に身を包んだ「雲」のパフォーマーは公園内を浮遊することで、雲が地上に舞い降りた景をつくりだし、展示作品の本体のボリューム及び多様性を高める仕掛けを演出した。会期中不定期に現れた雲の演者は、日々かたちを変え動き姿を消す雲の様相を表現し、トロールの森全体をさらに盛り上げ、来場者と作品の関係性を更に繋げる役割を果たした。

パフォーマンスと公園内の浮遊に加え、落書きワークショップの第2バージョンも開催した。参加者の秘密や

ストレスを和紙にこっそり書いてもらい、雲の落書き板の裏面に張っていく体験型のプロジェクトで、参加者とパフォーマーが混然一体となり作品『Obscured by Clouds』が、人々とアートの出会いの場として機能した。

4. おわりに

『トロールの森』は、アートという媒介を介して、公園から街全体を繋げるという特徴的な国際アート展である。研究の一貫として野外作品の出展・まちなかアートイベントのパフォーマンスに出展参画することにより、建築や地域性にとどまらず、街全体を繋げる実践の一活動と位置付けられる。今後継続活動をおこなうことによりアート展とまちなかとの関係性を考察する資料の蓄積をおこなっていく。

謝辞：本稿をまとめるにあたり工学部建築デザイン学科、工藤聖奈（4年）作成の作品報告資料を基に執筆を行った。感謝の意を表する。